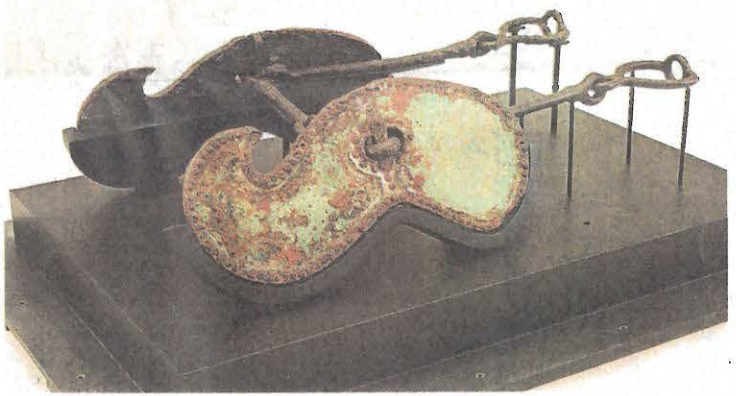
えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ㉒⓪

装飾的馬具 古墳に副葬

f字形鏡板付轡



猿ケ谷2号墳から出土したf字形鏡板付轡＝県歴史文化博物館蔵

馬は5世紀ごろに大陸から朝鮮半島を経由して日本列島へ持ち込まれたとされている。生き物である馬の痕跡は、遺跡には残りにくいが、当時の人々にとって馬がどのような存在だったかを考えるヒントとなるのが、古墳から出土する馬具である。

本資料は伊予市にある猿ケ谷2号墳に副葬されていた鉄製の轡（くつわ）である。轡は馬をコントロールするために欠かせない馬具で、馬の口にかませる銜（はみ）、銜を固定する鏡板（かがみいた）、手綱を付ける引手（ひきて）から構成される。轡があることは、馬の存在を示すとともに、乗馬が行われていたことも意味する。

本資料は鏡板がアルファベットのfの字に似た形をしており「f字形鏡板付轡」と呼ばれている。鏡板の長さは23・8㌢、幅は中央部で8・5㌢あり、大きい部類に入る。共伴する須恵器の年代から、6世紀中ごろのものとされている。

鏡板部分は金銅板をかぶせ、端を縁金具で覆い鋲（びょう）留めしている。鋲の数は120個以上あり、端を留める役割と共に装飾の目的で施されたと考えられる。

鏡板の中央部には、同じく鋲で囲われた「中」の字のような穴があり、ここに銜が取り付けられている。銜は両端を輪状にした鉄棒を2本連結したものである。それぞれの鉄棒の連結していない側の輪は、鏡板の穴に通してある。同じ輪には、引手も接続される。こうした銜や引手の連結部分は鏡板の内側にあり、外側からは見えないようになっている。馬が装着したときの見た目の美しさも考慮してつくられている。

f字形鏡板付轡は、類似した形のものが朝鮮半島でも見つかっており、馬の日本への流入経路を考える上でも重要な馬具である。この形状の轡は、5世紀の半ばから6世紀半ばにかけて古墳の副葬品として広くみられ、この時期に馬が日本に定着したことや馬具の国産化が行われたことがうかがえる。

本資料が出土した猿ケ谷2号墳は、墳丘規模39㍍の前方後円墳である。当古墳の石室からは、装飾的な馬具であるf字形鏡板付轡のほか、同じく装飾的な大刀も出土しており、被葬者は有力者であったと考えられる。馬具が古墳に副葬されていることは、馬が権力と結びつく存在であったことも示している。

（学芸員・三浦彩）

＜随時掲載します＞

f字形鏡板付轡は9月19日～11月23日、県歴史文化博物館（西予市）のテーマ展「馬 人と暮らしてきた動物」で展示予定。

掲載許可番号：d20230301-04